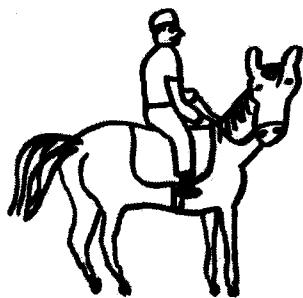


9月(上) まじで！ 偷々号がす 直観かを磨くにはどうするか？

今週の倫理 1045号

2017.9.2 ~ 9.8

九月のテーマ 直観を磨く



え・浅妻健司

大決断の 抛りどこ らを持つて

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載します。

う決めるという、抛りどころが必要だ。それがなくては、決めようがない。これはいわば決断の基礎であり、根拠である。それによつて、方向が決められるのだ。では、その根拠をどのようにして得ればよいのだろうか。

囲碁や将棋の専門家は、盤を前にして時には何時間も考える。短時間で数百手も先を読むというそのままの道の達人でも、次の一手を決断するのに長時間をかけることがあるというのは、やはりこうしたらよい手、勝つ手になるという根拠を長時間かけて探しているわけだ。棋士たちの場合、次の一手を読み切ることが難しくて、どうしても読みきれない時は、持ち時間の切迫もあり、最後は勘によって決めなければならないだろう。

私たちの日常生活でも、最後は直観、するどい閃き、強く心に映じたもの、いわゆる勘によつて決めることは多いのである。いくら読み切ろうとしても社会の変化、

決

断はどうしたらできるのか。決断には、こうだから、この直観を正しく働かせていることが多い。これには平素の生活が大切だ。朝自然に目がさめる。起きようと心に思う。これは朝の直観、毎日の始まりである。「起きよ」と直観したら、すぐに起きる。夜具の中にいつまでもモゾモゾしているような生活では直観の働きが悪くなる。試しに自分でやってみると、まず一日のスタートから直観してゆくことによって、勘は冴えてくる。応待も素早く、決断もすぐ下せるようになる。反応があぶいというのは、気づいたことをさつさと行なわないので、気づいたことをさつさと実行することである。

これは利害得失にこだわるのでなく、相手のことを十二分に尊重するという「倫理」の実践である。これは商道にかぎらず生活の根底にあるべき重要な基準である。これを根拠にして決断をくだすよう心がけてゆくと、案外に迷いが少なくなる。そして一時的には不幸になるようなことがもしあつても、やがて眞の幸福が与えられるようになるのである。

大決断をするには、平素から小さな決断をテキパキと下すようにする。小さな決断をおろそかにしていては、大決断はできない。小も積もれば大となるというが、決断は小が積もって大となるとい

うより、小さなことでいつもぐずぐずと迷つているような直観の働き方では、大きなことに臨んでしてゆく。

成功している人たちは、この直観を正しく働かせていることが多い。これを主にして考え、自分の利益だけに重点をおくという生活をしないことだ。

（『丸山竹秋選集』より）